次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお設問の都合で本文の段落に❶～⓱の番号を付してある。

❶今は、モノも人も、経済も情報も、国境をさまざまに行き交うようになりました。国の内から外へ、また国の外から内へ、行き来することがごく普通のことのようになってきた。けれども、言葉はどうだろうかと考えるのです。

❷言葉は人の生活の日常に深く結びついています。[　A　]、お互いの日常を親しく固く結び合わせるようになればなるほど、それぞれの人にはっきりとした限界を背負わせるのも、言葉です。それぞれの国にとっての国語のように、それぞれを深く結び合わせると同時に、言葉は、それぞれにその言葉の限界を背負わせずにいないのです。

❸言葉以上にお互いを非常に親しくさせるものはありません。にもかかわらず、その言葉を共有しないとき、あるいはできないとき、知らない国のまるで知らない言葉がそうであるように、言葉くらい人をはじくものもありません。際立って親和的にもなれば、際立って【　X　】的になるのも、言葉です。

❹けれども言葉には、(a)もう一つの言葉があります。在り方も、働きも異なる、別の言葉。ないもの、ここにないもの、どこにもないもの、誰も見たことのないもの、見えないもの、そういうものについて言うことができる言葉です。

❺たとえば、社会という言葉。社会という言葉は誰でも知っていますが、実際に、社会というものをこれが社会だと、机を指すように、草花を指すように、これが社会だと指すことはできません。世界という言葉も同じです。世界ということを知っていても、世界というものを、この目で見たことはないのです。

❻そのように、心の中よりほか、どこにもないものについて言うことのできる言葉があります。自由。友情。敵意。㋐ゾウオ。そういった言葉は、誰も見たことがないけれども、そう感じ、そう考え、そう名づけて、そう呼んできた、そういう言葉です。

❼国境を越える言葉、あるいは越えられる言葉ということを考えるとき、実は国境を越える言葉というのは、このないものについて言うことのできる言葉ではないだろうかと思うのです。(b)国境を越えるというのは、外国の言葉をいくらか覚えるというのとは違う。ないもの、見えないもの、その言葉でしか感得できないものを、国と言葉を異にするお互いの間でどんなふうに持ち合えるか、ということだと思うのです。

❽自由という言葉について思いめぐらすとき、私たちは自由という言葉はどこからやってきたか、考えます。自由を見た人はいない。机の上に転がっているものでもないし、公園に行けばあるというものでもない。店で買えるものでもない。[　B　]、私たちは自由という言葉を知って、自由という言葉を通して、自由というものを感得し、そう感じられる感覚をそう呼んで、そう名づけて、その言葉を自分のものにしてきました。

❾そして思うことは、日本語の自由という言葉に表され、私たちがその言葉によって感じとることのできる感覚を、異なる国々で、違う土地で、今、同じように、それぞれの国の言葉、土地の言葉で、自由と呼び、自由と名づけて、同じに感じている人々がいるだろう、ということです。

❿そういう㋑カクシンを可能にするのが、国境を越える言葉の力であり、そのようにそれぞれの言葉を通じて、お互いを繋ぐべき大切な概念を共有することが、実は言葉を異にするお互いの共生を可能にしていくのだ、という

ふうに思うのです。

⓫かつて同じ時代に、同じ思いを胸底に秘めてウイった二人の詩人がいます。

⓬一人は日本の詩人、宮澤賢治です。宮澤賢治の「烏の北斗七星」という童話は広く知られていますが、それは敵の死骸をエホウムる烏の兵士の、星への祈りの言葉で結ばれています。「ああ、(……)どうか憎むことのできない敵を殺さないでいいように早くこの世界がなりますように。そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません。」

⓭もう一人は、宮澤賢治とほぼ同じ歳月を生き、パリでオヒンキュウのうちに死んだペルーの詩人、セーサル・バジェッホです。バジェッホに、こういう詩があります。

たたかいが終わって、
戦士が死んでいた　男がひとりやって来て
言った。――《いけない　死ぬのは！　きみをこんなにも愛してる！》
けれどもその屍体は　ああ！　死につづけた

⓮バジェッホを宮澤賢治は知らなかったでしょうし、バジェッホもまた宮澤賢治を知らなかったでしょう。二人の詩人は、いずれも二十世紀の二度目の大戦の前に世を去り、いずれも世に知られるのは戦争の後になってですが、しかし、二人の詩人の言葉に遺されているのは、そのときお互いに知る由もなかった二人の詩人が国境を越えて共有していたと言っていい、死者への深い祈りと沈黙です。

⓯その言葉によって、感じ、考え、受けとめるほかない言葉があります。そのように言葉でしか言い表せない大事なものを、国境を越えて、私たちはそれぞれの言葉のうちに、お互いに持ち合うことができるということを、二人の詩人の言葉は伝えています。

⓰国境を越え、それぞれの違いを越えるのは、言葉でなくて、言葉が表す概念です。

⓱(c)概念は音楽に似ています。それぞれの言葉という楽器によって、私たちにとって大切な概念を、誰に向かって、どう演奏するか。何より国境を越えた【　Y　】が求められなければ、たやすく過つだろう。そう思うのです。

問1　傍線部㋐～㋔を漢字に改めて書け。（各3点）

問2　空欄［　A　］、［　B　］に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。（各3点）

［　A　］

① それだけに　② なぜならば　③ そのかわり
④ なかでも　⑤ いずれにせよ

［　B　］

① むしろ　② しかも　③ すると
④ そして　⑤ しかし

問3　空欄【　X　】、【　Y　】に入る語として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。（各3点）

【　X　】

① 威圧　② 論理　③ 利己
④ 排他　⑤ 感情

【　Y　】

① 世界の同意　② 相互の共生　③ 言葉の感得
④ 概念の共有　⑤ 時代の感覚

問4　段落❶の内容を要約したものとして、最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。（5点）

① 言葉が翻訳されるかどうかは未知である。
② 通常の言葉は国境を越えることはない。
③ 言葉は情報等と同様に国境を越え得る。
④ 特別な言葉は国境を越えることがある。
⑤ 情報等が国境を越えるのは現代的な事象である。

問5　傍線部(a)「もう一つの言葉」とあるが、それはどういうことか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。（6点）

① 人の生活の日常に深く結びつき、国境を自在に行き来することができる言葉。
② お互いを非常に親しく結びつけ、その言葉でしか感得できない感覚を想像させる言葉。
③ 人の生活の日常から離れ、人の心中にしか存在しない概念を指し示す言葉。
④ 言葉の限界を超え、お互いを固く結びつけ共感を育てることのできる言葉。
⑤ お互いに知ることがない具体的な概念を、国境を越えて共有することができる言葉。

問6　傍線部(b)「国境を越えるというのは、外国の言葉をいくらか覚えるというのとは違う」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから一つ選べ。（6点）

① 単にある言葉に対応する他言語の言葉を知っても、その言葉によって指し示される概念を共有することにはならないから。
② 他言語の習得は、主に概念を共有する目的で行われるため、実際に覚えているかどうかは問題とならないため。

③ 違う言語を国語とする人同士が概念を共有するためには、言葉の親和的な側面に着目する必要があるから。

④ 抽象的な概念を表す語は、ある言語特有のものであるから、語学とは根本的に関わりが無いから。

⑤ 抽象的概念を共有するためには、自他の言語における構造的な違いを理解しなければならないから。

問7 傍線部(c)「概念は音楽に似ています」とあるが、どういう点が似ているというのか。最も適当なものを次の①～⑤のうちから二つ選べ。（6点）

① 音楽がさまざまな楽器の演奏が組み合わさることによって曲がなりたつのと同様に、概念が複数の言語で共有されて意味が重層的に理解されるという点。

② 音楽が演奏されることによって作曲家の意図が表現されるのと同様に、概念が言葉によって表現されることで意味が確定されるという点。

③ 音楽が国境を越えて人々を感動させる力をもっているのと同様に、概念がどのような言葉で表現しても等しく人々を動かす力をもっているという点。

④ 音楽が楽器によって演奏されてはじめて音楽となるのと同様に、概念が言葉によって表現されてはじめて共有可能なものになるという点。

⑤ 音楽が楽器や演奏方法によって異なった受け止められ方をするのと同様に、概念がどのような言葉を用いるかによってさまざまな表現になりうるという点。

2020年度　課題問題解答用紙

3年　組【　　】

／50

問1（各3点）

点				
点	点	点	点	点
㋐	㋑	㋒	㋓	㋔

問2（各3点）

点	
点	点
A	B

問3（各3点）

点	
点	点
X	Y

問4（5点）

点

問5（6点）

点

問6（6点）

点

問7（6点）

点